

# 山と博物館

第44巻 第10号 1999年10月25日

市立大町山岳博物館



「雲溢れる空」北アルプス唐沢岳より

撮影 大石高志

空 — 毎日、空を眺める暮らし —

藤沢 秀

大正中期から昭和初期へかけて、北アルプス連峰や黒部溪谷の上流を克明に写真と紀行文でまとめた冠 松次郎著「雲表を行く」は、昭和十八年に二千部を発行。私の秘蔵書の一冊である。

布貼り装丁の厚い表紙の中は、北アルプスの山々や黒部の溪谷など百七ヶ所を一頁つづの写真と文章の見開きで詳しく紹介している。

中程の「大町から見た山々」の頁は、特に写真が二頁横大、文章も二頁にわたり、「居ながらにして、山の懐からくる鬱気を感じるのは大町が第一だ」とか、山へ登らず対山館ですごした宿での人との交流などが楽しく述べられている。

私が東京から大町へ移住して十年ほどになるが、今住んでいる家は「雲表を行く」の大町の二頁と全く同じ眺めの場所だから、人間臭さのある近景を除き目線からやや上の後立山連峰の中腹から遙かな空を仰ぐ視野は居ながらにして当時の冠さんと同じ気分になれることができる。

午前五時、といえは、かつての東京暮らしの頃は徹夜の仕事を終えて寝る時間であった。

それが大町の今は起床の時間である。庭に椅子を持ち出して間近に北葛岳、蓮華岳、爺ヶ岳、鹿島槍ヶ岳、遠く五竜岳までの一望を、夏なら少し早く空全体の朝焼けの一瞬をゆっくり待ち、冬なら防寒具をしつかり着込み、山肌の雪が徐々に朱に染まってゆく移ろいを拝む気持ちで眺める。

飽きっぽく何事も続かない私が「よくもまあ…」と言われるほどこれは十年間続いている。

この静寂な約一時間は、タイムトンネルを抜けなくても、まさしく「地球創世とか野性味との触れ合いができる」時間である。

「風が見えれば自然人間として及第点」といわれるが、毎日、山や空を仰いでいるとゆつくり動く雲もよく見えるようになってきた。

冠さんは、大町まできて「山に登らずとも、余暇の数日を山の見える静かな部屋で過ごすことを、またとない楽しみにしている」と「大町から見た山々」で最後を結んでいる。

登山人口の増加で山が荒れつつある昨今、大町市は登山の玄関口ではなく、山をどう眺めてすごせる町かで観光立市の知恵を考える時期にきているのではないだろうか。(旅行作家)

## ちやんめろに春を想う

尾 沢 洋



フキノトウ

とんでもない時間に電話が鳴った。北米で働く弟からだ。その内容がふるってゐる。FAXで日本から送られた新聞のテレビ欄をみての話だ。「ちやんめろの詩」という見出しをみて小谷が舞台の話かという。眠い目をこすりながら簡単な説明をする。「脱サラで東京から小谷に移り住んだ人がそこで生活体験をつづったもの、化粧品会社の懸賞に応募して入賞、ドラマ化された」と。弟はやっぱりそうかというれそうに電話を切る。もう随分前のことだが今でも時々兄弟の間でもちだされる話だ。時差を忘れて思わず電話をかけたせいでしまった言葉「ちやんめろ」。何てこ

とはない、春あたり前に目にするふきのとうのことだ。だがおもしろいことにこの呼び名は小谷村だけのものだ。隣の白馬から大町に來れば、「ふきのとう」、あるいは「ふきほこ」と呼ばれる。小谷は雪深い村だ。私も弟もその村で育った。三月下旬、一面白い雪に覆われているがあたたかな春の陽を浴びた傾斜地の水田の土手とどこどこ顔を出す。その場所、そして顔を出す順番は毎年ほぼ決まっている。それがどんなに待ち遠しかったことか。村人は争ってまだ芽を出したばかりのちやんめろを採る。このちやんめろ、実は昨年秋にすでに育っている。霜枯れのふきの葉をよけてみるといくつも顔を出す。だが苦くて食べられない。永い冬、雪の下で耐えた芽は苦さもなく絶妙な味で楽しませてくれる。



カタクリ

村人はちやんめろを食べるといふより春を食したのだと思う。その証拠に半月もたち、雪が消え去った土手はちやんめろで黄色く染まる。その頃にはもう誰も食べない。あんなに争ってまで手にしたものを……

どうして小谷地方だけが「ちやんめろ」と呼ぶのか、ずっと謎だった。そして今でも謎のまま。かすかな手がかりはある。後述するがミズバショウの小谷での呼び名を調べたことがある。「エンメロ」と教えてくれた老人がいた。また別の人はカタクリのことを「エンメロ」と呼んだ。何とよく似た呼び名のことか。そして二つとも雪だけに見られる花だ。「メロ」という言葉の中に何かあるはずだ。

宮沢賢治の作品「おきなくさ」の中にもしろい一節がある。最初の部分だ。この花を岩手ではうすのしゅげと呼ぶ、わかつたようになわからぬような書き、それと同じ例として「たとえば私どもの方ではねこやなぎの花芽をべむべろと言いますがそのべむべろが何のことか、わかつたようなわからないような気がするのと全く同じです」と続いている。これまた全く同じひびきを感じる。小谷、岩手、その距離は遠い。だが深い雪国という点には同じだ。そして何よりも全ての花が雪どけに咲くという共通点を持つ。雪が深ければ深い程、冬がきびしければきびしい程、そこで生活する人達の春への想いは強い。その想いが全て「メロ」もしくは「ペロ」という言葉に託されていると考えるのは決してこじつけではないと思う。エンレイソウという花がある。大きな三枚の葉に小さな茶色の花をつける。ほとんど気にとめることもない地味な花だ。高山植物の本に紹介されているからあまり低い所にはないのだろう。雪深い小谷村に



オキナグサ

数がかかるのだから。驚く程の長い草だ。地味な花だが、この草の土から芽のぞかせたばかりの風情は実にいい。や

わらかな葉が花をつつむように鉛色の茎からわずかな首をかしげて出ている。雪だけ、まだ周囲の草花があまり顔を出していないから可愛らしさがより際立つ。雪がとけ待望の黒い土、そこに来る年も同じ芽が出てきたら、そしてそれが何十年も続いたら……

は多い。手許にある花の名前を紹介した本は二冊とも、どうしてこの名がついたかわからない……と書いてあるが、どうしてどうしてこんなにはつきりとしてすばらしい理由を持つた花はそうあるものでない。かつて私は相当期間「土工」をして日銭を取っていた。地球の表面をいじくる仕事はおもしろい。日常眼につかない物にお目にかかれる。あの細いつるの葛の根が、土の中では人の足程の太さに育っていたり、信じられない程太いミミズがいたり……。そんな中で一番興味があわいたのがエンレイソウの根茎だ。驚く程さまざまな大きさだ。ラッキョウ程の大きさからはじまり、大人のこぶし程の物まである。もつとおもしろいことに根茎の大小にかかわらず地上部の大きさは変わらない。大きな根茎を持つからといって決して巨大な葉をつけたり、茎の本数がふえたりはしない。皆同じに見える。一株で二〜三本しか出ない茎、当然葉の数も少ない。そんなわずかな葉のつくる養分は知れたもの。一体こぶし大に育つまでどの位の年



エンレイソウ

特別な想いを持って当然だろう。「お、また顔を出したな。お前も寒い冬を良くがんばったなあー」そんな呼びかけをしたにちがいない。その花に長寿をあらわす延命草という名がついてなんの不思議があるうか。私は民俗学を学んだこともないし、ましてや植物の生態を学んだこともない。ごく当り前の自然の中いれれば嬉しいだけの単純な男だ。だからこれから書くことは全て私の想像であり独断であるから腹を立てずに読み流してほしい。延びる年齢を延びる命と考えるとどうだろう。「延命」、「エンメイ」それがなまめて「エンメロ」。寒い冬に耐え

そこに暮らす人達が特別な想いを持って当然だろう。「お、また顔を出したな。お前も寒い冬を良くがんばったなあー」そんな呼びかけをしたにちがいない。その花に長寿をあらわす延命草という名がついてなんの不思議があるうか。私は民俗学を学んだこともないし、ましてや植物の生態を学んだこともない。ごく当り前の自然の中いれれば嬉しいだけの単純な男だ。だからこれから書くことは全て私の想像であり独断であるから腹を立てずに読み流してほしい。延びる年齢を延びる命と考えるとどうだろう。「延命」、「エンメイ」それがなまめて「エンメロ」。寒い冬に耐え



ミヤマエンレイソウ(シロバナエンレイソウ)

春一番に顔を出す草達への共感。感動の気持ち。その中でも姿だけでなく春の香りまで届けてくれるふきのとうに特別な感情をもって「ちゃんと顔を出してくれた命、ちゃんめろ」あまりにひどいこじつけということは私自身が一番よくわかっている。しかし、小谷でしか使われない、どう調べてもわからない言葉。それでいて雪だけのちゃんめろを語る時の人々の嬉しそうな表情を思い起こすたびに、そんな私の勝手な推理も一理あるのではないかと考えられるようになってきている。さきにミズバショウのことを書いた。もう少し正確に書くと、実際に「エンメロ」と呼んだ人はそう多くない。小谷で一番多かったのは「ウシブテ」であり姫川より西部はほとんどそうだった。東部、北小谷深原地区あたりでは「長者のタバコ」と呼ばれていた。



ミズバショウ

これは形状から良くわかる。わからなかったのは「ウシブテ」だ。だいぶ時間がかかったがある古老が明解に教えてくれた。「ありやー毒だ。ウシが食べば下痢をする。だでケツンベタぶつて食わせんようにしろってことだ」。化学肥料のなかつた頃水田の肥料は周囲の草が全て。傾斜地の土手の草は上の田の耕作者が三分、下が七分と決まっていたという。当然それだけでは不足なので牛をつれて山へ草刈に行



トリカブトの仲間

く。わずか行くだけでミズバショウがやわらかく育っている。それを食わずという名前。理由がわかればこれほどわかりやすい名はない。また冬眠からさめた熊がまずミズバショウを食べ糞をするという話も聞いた。下剤として利用しているのだ。そしてこの花をエンメロと呼ぶ人がいたという事実。やはり春一番と同じ場所に顔をだす花だからか？

9月2日付けの毎日新聞にちよつと気になった記事があった。「尾瀬の景観ピンチ、ニホンジカ北上、ミズバショウをバクバク」という見出しで。尾瀬も気がかりだが「バクバク」という表現がもつと気になった。毒草でなかったのか。今迄調べてきたことは間違いないのか。それとも牛や熊と鹿はそんなに食草がちがうのか？。失礼を承知で著名記事だったので記者の所属を調べ福島支局へ問い合わせしてみた。折りかえし丁寧な手紙で「ミズバショウばかりかトリカブトの中間のレイジンソウまで食べた痕跡があること、しかしバクバクは大袈裟、編集者が尾瀬といえはミズバ

ショウとの単純な発想で使ってしまった私も抗議したがとりあげてもらえなかった」と裏話まで書いて下さった。感謝している。葉草としてか偶然か、或いは「シカは毒を分解する酵素を持っている可能性もある」とも記してあった。繰り返し読み、自分の間違いに気づかされた。牛も食べるのだ。食べるから「ウシブテ」なのだ。それにしても、もし鹿が薬と知っていて食べるのだとしたらこんなおもしろいことはない。便秘に悩む巷の人間達のはるか上を行く鹿様だ。しかし貴重な尾瀬の湿原を護るため、彼等の運命はあまり明るいものではないだろう。

三つの花について書いてみた。しかし一体いつからどんな理由で植物名がカタカナで表示されるようになったのだろう。人がその生活の中でどんな想いで名付けてきたのかも少し漢字だったらある程度の想像はつくだろうに。延命草などその最もいい例だと思う。紅葉の山をとりまわりながら春の花のことを書かせていただいた。秋の山の変化は早い。春だったら五日後、十日後の想像がつくが、秋の山は一度降ったら全しておしまいだ。そんなあせりが山へ向かわせる。枯れたモウセンゴケの根元には、もうすっかりと来春の芽が用意されている。もうすぐ来る冬をどう過ごすか、次の春をどんな想いで迎えようか。そんな気持ちが白くなる髪とは逆に、私の気持ちの中の若さを保ってくれている。

(穂高町在住)

【写真①②③⑦】撮影 清水博文  
【写真⑤】撮影 千葉悟志

## —お知らせ—

大町山岳博物館では企画展「羽田智千代版画展—鳥の思考・虫の視点—」(十一月七日まで)の一環として、開催期間中に作者の版画家・羽田さんによるギャラリートーク(講演)を開催いたします。日時は一〇月三十一日(日)午後一時三〇分から三時三〇分まで、場所は大町山岳博物館・講堂です。

「私の中で遊ぶ子ども」というテーマで、作品の生まれる背景、子どもの作品にふれて感じることを、羽田さんにお話いただきます。

当日は午後一時から受付を行い、参加は無料です。なお、本館の企画展をご覧になる方は入場料が必要となります。

## —バックナンバーのお知らせ—

次の巻の「山と博物館」バックナンバーがあります。

▽第38巻第1号(平成5年1月)

至高の安らぎを作る(上)

吉田喜義さん、テント作りの思い出

▽第38巻第2号(平成5年2月)

ツキノワグマの生活 羽澄俊裕

至高の安らぎを作る(下)

吉田喜義さん、テント作りの思い出

## 山と博物館 第44巻第10号

発行 一九九九年十月二十五日発行

〒396 長野県大町市大字大町八〇五六一

市立大町山岳博物館

TEL 〇二六—一三—〇二二一

FAX 〇二六—一三—二二二二

印刷 奥村印刷

定価 年額一、五〇〇円(送料共) 切手不要

郵便振替口座番号 〇五四〇—七—一三三一九三